

【六曜（ろくよう）】

六輝（ろっき）ともいう。暦日の注。先勝（せんしょう）、友引（ともびき）、先負（せんぷ）、仏滅（ぶつめつ）、大安（たいあん）、赤口（しゃくく）のこと。14世紀に中国から伝えられた当時は、大安、留連（りゅうれん）、速喜（そくき）、赤口、将吉（しょうきつ）、空亡（くうぼう）といったが、その後、名称、順序ともに幾度か変わり、いまの形に落ち着いたのは天保（てんぽう）（1830～1844）のころという。一般に行われるようになったのもこのころからである。現在も婚礼には仏滅を避けて大安が選ばれ、葬式には友引が忌まれるなど、根強く生きている。本来は時刻の吉凶の占いで、先勝は午後は凶、友引は昼凶、先負は午後大吉、仏滅はすべてに凶で、大安はすべてに吉、赤口は正午のみ吉、とされる。六曜は暦日（旧暦）に次のように配当される。

先勝

読み方…せんしょう・さきかち・せんかち

先勝は「なるべく先まわりして行動する」と良い日とされており、午前中が吉、午後は凶の時間帯となります。

友引

読み方…ともびき・ゆういん

「友引」は「友人を引き込む」とされている日なので、結婚式の日としては良く、葬式をするのは特にNGとされています。朝は吉・昼は凶・夕方は吉です。

先負

読み方…せんぷ・せんふ・せんまけ・さきまけ

「先負」は午前中が凶で午後が小吉。先勝は午前中が吉と言われているので先負は午後が吉だと思われがちですが、先負の午後は小吉程度で特に良い時間というわけではありません。この日は「平常を装って吉」とされており、何事も起こらないよう無難に過ごすことがおすすめの日です。

仏滅

読み方…ぶつめつ

仏滅とは「物が終わる(滅する)日」です。悪い日だと思われがちですが、この日は仏事や別れたい人との別れには良い日と言われている。例えば悪縁を切り、改めて人生をスタートしたいときなどには適しています。お祝い事などはこの日を避けた方が良いでしょう。

大安

読み方…たいあん

大安は「やってはいけないことが何もない日」のこと。この日は大吉だと思われがちですが、「大いに安し」という意味をそのままとると「特に害のない日」となり、実は「小吉」のような日です。ただし、やってはいけないことや凶の時間帯がない分、結婚式などの長い時間帯で執り行われる行事はこの日にすると良いと考えられています。

赤口

読み方…しゃっこう・じゃっこう・しゃくく・じゃくく・せきぐち

赤口は、古来より魔物がいると考えられてきた「丑寅の刻(=午前2時～4時)」の時間帯の六曜で、日を占うものとなった今も不吉な日とされています。仏滅が「物が滅する日」であるのに対し、「赤口」は全てが消滅する日と言われており、この日もとても怖い日です。「大凶」とも言える日ですが、正午だけは吉となります。

【十干十二支（じっかんじゅうにし）】

干支（えと。幹支〈もとすえ〉の意）ともいう。中国の上古に始る暦法上の用語。

十干

甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸で、何を基準としたかは明らかでないが、もと一旬（10日）を表わす。

十二支

子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥。すでに殷代に、干支の組合せで暦日を表わしていた。前4世紀頃、十干が五行（木、火、土、金、水）に配当され、前2世紀頃、十二支が鼠、牛、虎、兎、竜、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪に配当され、これが伝えられて、日本では甲子を「きのえね」（木鼠）、乙丑を「きのとうし」（木牛）、丙寅を「ひのえとら」（火虎）のように呼ぶ。

漢代、前2世紀頃、干支の組合せが、年、月の順を表わすのに用いられ、十二支の時刻、方角などを表わすのに用いられるようになった。

干支とは、

十干：甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸

十二支：子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥

の組み合わせから成り、その組み合わせは60通りあります。よって、60年で一巡し、「還暦」となります。60歳を迎えた人を還暦としてお祝いしますが、「還」の字には、かえる、ひきかえす、もどる、という意味があります。還暦とは、「暦＝干支」が一周して元にもどるという意味なのです。

「十干」はなじみのない方も多いたと思いますが、もとは1から10までを数えるための言葉です

【二十四節気（にじゅうしせつき）】

二十四節気（にじゅうしせつき）は、今でも立春、春分、夏至など、季節を表す言葉として用いられています。1年を春夏秋冬の4つの季節に分け、さらにそれぞれを6つに分けたもので、「節（せつ）または節気（せつき）」と「気（中（ちゅう）または中気（ちゅうき）とも呼ばれる）」が交互にあります。太陰太陽暦（旧暦）の閏月を設ける基準となっており、中気のない月を閏月としていました。二十四節気は、その年によって1日程度前後することがあります。

春

立春（りっしゅん）	雨水（うすい）	啓蟄（けいちつ）
春分（しゅんぶん）	清明（せいめい）	穀雨（こくう）

夏

立夏（りっか）	小満（しょうまん）	芒種（ぼうしゅ）
夏至（げし）	小暑（しょうしょ）	大暑（たいしょ）

秋

立秋（りっしゅう）	処暑（しよしょ）	白露（はくろ）
秋分（しゅうぶん）	寒露（かんろ）	霜降（そうこう）

冬

立冬（りっとう）	小雪（しょうせつ）	大雪（たいせつ）
冬至（とうじ）	小寒（しょうかん）	大寒（だいかん）

【雑節（ざっせつ）】

雑節とは、二十四節気・五節句以外の季節の移り変わりの節目となる日のこと。

二十四節気を補う意味合いを持っていて、一年間の季節の移り変わりをよりの確につかむことができます。

いずれも生活や農作業に照らし合わせてつくられていて、古くから日本人の生活の中に溶け込んでいました。年中行事、民俗行事となっているものも多くなじみ深いものです。

社日（しゃにち）

春分、秋分に最も近い戊（つちのえ）の日で、1年に2回ある。春には豊年を祈り、秋には成熟を祝う行事をそれぞれ行う。

節分（せつぶん）

元は四季にあったが、後に春だけについていわれるようになった。立春の前日のことで、邪気を払う行事がなされる。

彼岸（ひがん）

春分と秋分の前後の3日ずつの計7日のこと。初日を彼岸の入り、当日を中日（ちゅうにち）、終日を明けと呼ぶ。

土用（どよう）

立春、立夏、立秋、立冬の前18日間。この期間は、土公神（どくじん）が支配するといわれ、土を犯すことは忌むべきこととされた。

八十八夜（はちじゅうはちや）

立春から数えて88日目をいい、種まきの目安の日。

入梅（にゅうばい）

二十四節気のうち、芒種の後の壬（みずのえ）の日。梅雨はそれから31日間とされる。

半夏生（はんげしょう）

天より毒気を下す日という。夏至より10日後とされる。

二百十日（にひゃくとおか）

立春から数えて210日目の日。必ず暴風雨があるとされる。

二百二十日（にひゃくはつか）

立春から数えて220日目の日。二百十日と同じ意味を持つ。

【朔望（さくぼう）】

（「朔」は一日。「望」は一五日）陰暦の一日と一五日。また、月の満ち欠け。

【和風月名（わふうげつめい）】

旧暦では、和風月名（わふうげつめい）と呼ばれる月の和風の呼び名を使用していました。和風月名は旧暦の季節や行事に合わせたもので、現在の暦でも使用されることがありますが、現在の季節感とは1~2ヶ月ほどのずれがあります。

和風月名の由来については諸説ありますが、代表的なものを紹介します。

旧暦の月	和風月名	由来と解説
1月	睦月 (むつき)	正月に親類一同が集まる、睦び（親しくする）の月。
2月	如月 (きさらぎ)	衣更着（きさらぎ）とも言う。まだ寒さが残っていて、衣を重ね着する（更に着る）月。
3月	弥生 (やよい)	木草弥生い茂る（きくさいやおいしげる、草木が生い茂る）月。
4月	卯月 (うづき)	卯の花の月。
5月	皐月 (さつき)	早月（さつき）とも言う。早苗（さなえ）を植える月。
6月	水無月 (みなづき、みなつき)	水の月（「無」は「の」を意味する）で、田に水を引く月の意と言われる。
7月	文月 (ふみづき、ふづき)	稲の穂が実る月（穂含月：ほふみづき）
8月	葉月 (はづき、はつき)	木々の葉落ち月（はおちづき）。
9月	長月 (ながつき、ながづき)	夜長月（よながづき）。
10月	神無月 (かんなづき)	神の月（「無」は「の」を意味する）の意味。全国の神々が出雲大社に集まり、各地の神々が留守になる月という説などもある。
11月	霜月 (しもつき)	霜の降る月。
12月	師走 (しわす)	師匠といえども趨走（すうそう、走り回る）する月。